

石川縣能登國鹿島郡久江村陷落

地調査報告

東京帝國大學大學院學生

理學士 大日方順三

緒言

明治三十七年五月震災豫防調査會ノ囑託ヲ受ケ石川縣能登國鹿島郡久江村ニ於ケル陷落地ヲ調査セリ。今茲ニ其ノ結果ヲ報告ス。

余ノ調査ニ關シテ便宜ヲ與ヘラレタル石川縣廳及ビ久江村役場ノ吏員及ビ村民諸氏ノ好意ニ對シテハ茲ニ謹ンデ謝意ヲ表ス。

目次

- 第一 位置及ビ地形
 - 第二 陷落其ノ他地變ノ狀況
 - 第三 地變後ノ狀態及ビ地變ノ原因
 - 第四 圖版説明
 - 第五 參考書類
- 第一 位置及ビ地形
- 久江村ハ石川縣鹿島郡ニ屬シ、同郡七尾町ノ西南約三里ノ所

ニアル小村落ニシテ、七尾鐵道ノ能登部停車場ヲ距ル東方約半里ナリ。村ハ寶達山脈ノ西側ヲ東南ヨリ西北ニ流ル、久江川ノ沿岸ニアリテ東南ヨリ西北ニ細長ク、大字久江及ビ久江原山分ノ二ニ分タレ、久江原山分ハ更ニ大原、中原及ビ北木原ノ三小字ニ分ル。戶數總テ百九十餘、多クハ農ヲ業トシ、又機業及ビ石灰製造ヲ營ムモノ數戸アリ。大字久江ハ久江川ガ山間蹙迫ノ地ヲ離レ始メテ平野ノ中ニ出デタル咽喉部ニアリテ戶數百七十餘、久江村役場及ビ小學校等皆此處ニアリテ七尾街道ノ衝路ニ當リ、東北ハ二宮村ヲ經テ七尾町ニ至ルベク西南ハ御祖村字小田中ヲ經テ飯山今濱等ノ諸邑ニ達スルヲ得ベシ。大字久江原山分ニ屬スル小字大原、中原、北木原ハ久江川ノ上流山間ニアリテ、大原ニハ戶數三、中原ニハ六、北木原ニハ八アリ。何レモ山間ノ溪流ニ浴ヘル地ヲ拓キ僅少ノ田畑ヲ作り、村民ハ之レニ頼リテ以テ其ノ生計ヲ營ム。而シテ今回變動ノアリタル地ハ實ニ此ノ久江原山分ニ屬スル小字北木原ナリトス。

久江村ノ東方ニアル寶達山脈ハ能登越中ノ界ヲナシテ西南々ヨリ東北々ニ走レル山脈ニシテ、久江村附近ニ於テハ海拔高距平均三百五十米内外ヲ保チ緩慢ナル傾斜ヲ有ス(第三版甲)久江村ノ西方ニハ第四紀層ヨリ成レル一大平野西南ヨリ東北

ニ長ク横ハリ、其ノ幅一里以上ニ達シ其ノ西方ニハ寶達山脈ト相對シテ此ノ平野ヲ挾ミ第三紀層ヨリ成レル極メテ低ク且ツ緩慢ナル丘陵アリ。久江川ハ寶達山脈ノ西側ヲ東南ヨリ西北ニ急駛シテ平野ニ出デ、西南ニ折レテ邑知瀉ニ注グモノナリ。

久江村大字久江ハ前記平原ノ東縁即チ寶達山脈ニ屬スル第三紀層ノ丘陵ガ此ノ平原ニ盡クル所ニ在リテ、西方ニハ茫漠タル平野遠ク相連ナリ、東方ニハ近ク寶達山脈ノ丘陵ヲ望ム。久江村役場ヨリ久江川ノ右岸(東北岸)ニ沿ウテ東南ニ久江川ヲ溯レバ左右ノ丘陵ハ漸ク川ニ接シテ起伏スレドモ尙ホ沿岸ノ平地ハ幅凡ソ五百米ヲ有セリ。然レドモ川ヲ溯ルニ從ツテ兩岸ノ丘巒ハ愈々迫リ、役場ヨリ約十町程來リタル所ニ於テハ沿岸平地ノ幅約二百米トナリ、之レヨリ道ハ東々南ニ轉ズ。役場ヨリ約十二町ノ所ニ於テ一主流南方ヨリ來リ本流ニ會スルアリテ、其ノ會點ニ近ク一石灰爐アリ。此ノ支流ハ小字大原附近ヲ流レテ來ルモノニシテ兩岸平地殆ンド無ク、之レニ迫レル丘陵モ傾斜稍々急ニ、水ハ急流激湍ヲナシテ奔下セリ。此ノ會點附近ヨリ本流沿岸ノ平地モ愈々狹クナリ、丘陵亦岸ニ臨ミテ急ニ起チ、水流甚ダ急ニシテ山間ノ溪流タル狀ヲ呈セリ。會點ヨリ尙ホ三町程東方ニ進メバ乃チ河流ノ二分セル

ヲ見ルベク右ナルハ東南々ニ方レル小字中原附近ヨリ來ルモノニシテ、左ナルハ東南ノ方小字北木原近傍ヲ流レテ來ルモノナリ。此ノ二流ハ何レモ寶達山脈ニ屬スル山嶽ノ側面ヲ急駛スル溪流ニシテ沿岸ニ平地ナク、之レニ接スル山ノ側面ハ前者ニアリテハ概ネ急傾斜ヲナセリ(第三版乙)。左方ノ支流ハ即チ今回陷落其ノ他ノ地變アリタル小字北木原地方ヲ流ルルモノニシテ、之レニ沿ヒテ二支流ノ會點ヨリ東北ニ溯ルコト約二町半ニシテ河流ハ急ニ東ニ折ル。此屈折點ニ至レバ今回ノ地變ノ爲メニ押シ出シ來レル泥土ハ累々トシテ厚ク堆積シ、此ノ屈折點マデ來リタルヲ認ムベシ(第四版甲)。之レヨリ谷ハ暫ク東西ノ方向ヲ取り、更ニ東南ノ方ヲ指セドモ、此ノ屈折點以上ノ地ハ全ク今回地變ノ影響ヲ蒙リ、全ク泥土ノ蔽フ所トナリテ(第四版乙、第五版甲)、溪谷ノ舊形ハ其ノ横斷面ニ就テ之レヲ見ルニ、往時ハ蓋シ \vee 狀ヲナセシモ今ハ泥土ニ埋メラレシヲ以テU狀ヲナシ谷底廣クナレリ。而シテ水流ノ舊路ハ全ク埋メラレ、水ハ新タニ此ノ泥土ヲ穿チテ不規則ニ流レ去リ、往々其ノ流路ヲ轉ズルコトアリ。而シテ谷側ノ傾斜ハ中原ノ谷ニ比シテ稍々緩ナリトス。

第二 陷落其ノ他地變ノ狀況

此ノ地ニ於ケル地變ハ敢テ今回ニ始マリタルニハアラズシテ

遠キ過去ヨリ已ニ幾度モ陷落、地割レ等ノ災厄ニ遭ヒタルコトアリ。今村民等ヨリ聞キ取りタル事實ヲ綜合シテ過去及ビ今回ノ地變ノ狀況ヲ略記スベシ。

今ヨリ凡ソ五十六年前ニ地割レヲ生ジタルコトアリ。地面ハ滑リテ一年ニ數寸ヅ、下方ニ移動シ、地表ハ凸凹起伏シテ所々ニ小池ヲ作り、田畑家屋ニ著ルシキ損害ヲ與ヘタリ。

其ノ後暫クノ間ハ著ルシキ變動ナカリシモ地面ニ些少ノ割レ目ヲ生ズルハ敢テ珍ラシキコトニアラスシテ、明治六年ノ頃小字北木原ヨリ小字中原ニ通ズル道路ノ近傍ニ於テ略々谷ノ

方向ニ並行ナル地割レヲ生ジ、明治十一年五六月頃小字北木原ノ宅地ノ一部凡ソ三反歩許陷落シ、明治二十六年二三月頃ニハ先キニ明治六年ニ生ジタル地割レニ沿ウテ多少ノ變動ヲ

ナシ、尙ホ其ノ東南ニ近ク、之レト同方面ニ走レル地割レヲ生ジタリ。

明治三十二年ノ春頃ニ北木原ノ田畑ニ於テ所々ニ局部ノ陷落ヲ生ジ、同年十一月頃ヨリ翌年三月頃ニ至ル間變動稍々甚ダシク、地面ハ波狀トナリテ所々ニ水溜リヲ生ジ、地面ハ一日

ニ數寸ヅ、谷ノ下方ニ向ツテ移動シ來リ、全體ニ於テ十五間乃至五十間位移動シ、同年四五月ノ頃變動ハ一時中止セリ(本會報告第三十八號神保博士報文參照)

明治三十三年十二月頃ヨリ三十四年三月頃ニ至ル間又所々ニ陷落ヲ生ジテ地面ノ移動アリタリ(本會報告第三十八號神保博士報文參照)。

此ノ後明治三十五年ノ末ニ至ルマデハ著ルシキ變動ハナカリシモ、此ノ地方ノ地面ハ決シテ全ク靜穩ニ歸シタルニハアラズシテ、所々ニ地割レヲ生ジ、地面ハ或ハ隆起シ或ハ沈降シテ波狀ヲナシ、田畑ニハ絶エズ手入レヲ加ヘザルベカラズ。

又地盤不安定ナル爲メニ家屋モ傾キテ幾度トナク補修ヲ加ヘツ、アリタリ。

明治三十六年春頃其ノ變動少シク大キクナリシガ、六月頃ニハ全ク靜止シ村民何レモ安堵シタリシガ、同年十二月頃ヨリ再ヒ少シク變動ヲ始メタリ。之レヨリ引續キテ多少土地ノ陷

落移動ハアリシモノ、如ク、本年一月初旬久江村役場助役松村某氏巡查島山某ト同行一尺以上ノ積雪ヲ踏ミテ北木原ヨリ

更ニ上方ノ山ニ至リシニ、所々ニ新ラシキ地割レヲ發見シ、又陷落セシ個所アリテ、其ノ段違ヒノ高サ三四尺ニ達セルモノアリタリ。其ノ後三月七八日ノ頃又至リシニ所々ニ陷落セ

シ所アリテ地面ハ波狀ニナリ、且ツ一月頃ト比較シテ約三十間位下方ニ移動シタルヲ知レリ。斯クテ遂ニ今回ノ大地變ヲ惹起スルニ至リシナリ。

ク變動甚ダシキヲ以テ北木原ノ村民ハ各々自ラ住宅ヲ取り壊シテ其ノ材木ヲ山側ノ安定地ニ運搬シタレドモ、土藏、納屋、廩等ハ皆其ノ儘ニナシ置ケリ。次イデ四月二十六日ニハ大雨アリ、二十七日ニモ少雨アリタルガ二十七日ニハ押シ出シノ勢益々甚ダシクナリ、午後三時頃ヨリ六時頃マデノ間ニ凡ソ十間ホド押シ出シタリ。カクノ如ク變動甚ダシキニモ係ハラズ北木原ノ村民ハ尙ホ變動地上ニアル納屋ニ住居シ、多少恐怖ノ念ヲ抱キタルモ二十七日夜ハ此ノ納屋ニ寢ネ、寢ネナガラ地面家屋等ト共ニ徐々ニ下方ニ押シ出シ行キシモノノ如シ。然ルニ二十八日午前二時頃或ル村民目ヲ覺マシテ屋外ヲ窺ヒタルニ、北木原家屋ノ所在地著ルシク下方ニ移動シテ四近ノ面目亦大ニ異ナリタリシカバ、其ノ地變ノ大ナルニ驚キ急ニ村民ヲ喚ビ起シテ家財雜具ヲ取り出シテ安全ノ場所ニ移スナド非常ノ混雜ヲ極メタリ。午前六時頃ニ至リテハ其ノ勢益々激シクナリ、岩塊壤土相激シテ轟々タル音ヲナシ、恰モ山嶽ノ鳴動スルガ如ク、又摩擦衝突ニヨリテ生ゼル砂塵ハ濛々トシテ高く昇リ恰モ火山ノ噴煙ノ如ク、其ノ押シ出シノ速度ハ明カニ目ニ見ユルヤウニナリ、一時間ニ十七八間程ニ達シ其ノ有様甚ダ悽シカリキ。是レニ於テ村役場ノ吏員及ビ大字久江ノ村民ハ多ク北木原ニ赴キテ其ノ急ヲ救ヒ、又大字

久江ノ或ル村民ハ泥土ノ押シ出シガ自己ノ部落ニマデモ及バシコトヲ恐レ家財ヲ取り出シ、又川岸ニ籬ヲ作りテ泥土ノ侵入ヲ防ガントスルナド大ニ狼狽セリ。而シテ押シ出シノ速度ハ或ハ大トナリ或ハ小トナリテ暫クモ一定セズ。斯クテ二十八日ノ午前中ニ北木原人家近傍ノ地ハ凡ソ百五十間程下方ニ押シ出シ、田畑ハ甚ダシク擾亂セラレ或ハ隆クナリ或ハ低クナリテ波狀ヲナシ又タ所々ニ割レ目ヲ作り、農作物ニシテ泥土ノ下ニ埋リタルモノ少ナカラズ、又タ納屋土藏等ハ何レモ傾斜シテ全キモノナク、或ハ半バ土中ニ埋モレ、此ノ外樹木ノ倒レタルモノ其ノ數ヲ知ラズ。又タ押シ出シタル泥土ハ谷川ノ流路ヲ塞ギタルヲ以テ所々ニ小池ヲ生ジタリ。正午頃ヨリ押シ出シノ勢大ニ衰ヘシカバ村民ハ泥土ノ上ニ藁板ナドヲ敷キテ以テ脚ノ没スルヲ防ギツ、各々再ビ納屋ニ赴キ家財ヲ取り出シニ勉メタリ。午後一時頃ニハ女夫池メナトノ下方ニアル一小池其ノ廣袤凡ソ三百坪深サ三四間アリシモノ其ノ岸急ニ崩壞シテ水ハ直ニ下方ニ流レ去リ池ハ全ク干涸セリ。午後二時頃ニハ越中トノ國境ノ山崩壞シ、午後二時ヨリ三時半マデハ押シ出シノ勢再ビ激シクナリタレド午前ノ時ホドハ甚シカラザリキ。午後四時頃ヨリハ押シ出シハ間歇的トナリ午後六時頃ニハ大ニ靜穩ニナリタリ。此ノ地變ノ爲メ北木原ノ家屋

及ビ其ノ近傍ノ宅地田畑等ハ始メヨリ凡ソ百五六十間程下方ニ押シ出シ來レルナリ。然ルニ二十八日ヨリ二十九日ニカケテノ夜ノ中ニ越中トノ國境ノ地又陷落シテ岩塊泥土ヲ押シ出シ來リ、其ノ岩塊泥土ハ北木原人家ノ舊所在地ヲ越テ、更ニ其ノ新所在地マデ來リテ、コレマデハ田畑ハ破壊セラレ、家屋ハ傾斜或ハ潰倒セシモ尙土中ニ埋モレズシテ僅カニ北木原部落ノ面影ヲ存セシモノヲ全ク土中ニ葬リタリ。是レガ爲メ家屋ハ皆土中ニ埋没シ、或ハ僅カニ其ノ屋根ノ一部ヲ露ハシ、或ハ全ク其ノ所在ヲ知り得ザルニ至レリ。又此ノ時マデハ田畑ハ大ニ損害ヲ蒙リタレド之レニ生育セル農作物ハ尙ホ多少殘存シテ農民ハコレニ一縷ノ望ヲ屬シタリシモ此ノ時ニ至リ、田畑ハ全ク泥土ノ下ニ没シタリ。從ツテ山側ノ安定地ニ難ヲ避ケタル村民ハ二十九日朝ニ至リ己ガ住宅附近ノ地ハ百五六十間モ下方ニ移動シ來リ大損害ヲ被リタル上ニ更ニ深く泥土ニテ蔽ハレ、住宅附近ニ於ケル喬木僅カニ其ノ半身ヲ土中ヨリ出セルヲ見テ甚シク吃驚落膽セリト云フ。二十九日朝ニ至リテハ變動大ニ緩トナリ、午前十時頃ニ至リテ全ク鎮靜ニ歸シ、其ノ後全ク變動ナシ。

此ノ地變ノ爲メニ北木原ノ溪谷ニ沿ヒタル田畑山林等ハ全ク泥土ノ下ニ埋没シ、建物ノ大多數ハ埋没或ハ倒潰シ、田畑ハ

殆ンド復舊ノ望ナク、其ノ泥土ニテ蔽ハレタル區域ハ谷ニ沿ウテ東南ヨリ西北ニ長ク、長サ一里ニ亘リ幅ハ二三町ヨリ廣キ所ハ五町ニ及ビ、曾テハ果穀好ク實リテ生計豊カナリシ北木原ノ部落モ今ヤ泥土岩塊累々タル一荒蕪地ニ變ジ、村民ハ山側ノ不變動地ニ藁小屋ヲ作りテ之レニ住シ、土中ニ埋没セシ家屋ノ材木ハ甚ダシク破壊セシモ其ノ一部分ハ之レヲ掘リ出スヲ得タリト云フ。今左表ニ其ノ一斑ヲ示ス。

田畑宅地山林原野ノ被害反別等調

一 大字久江原山分小字北木原ニ屬スル分

地目	被害反別	地價		復舊反別
		時價	實價	
田	三・九〇二九 ^{町反畝歩}	二二八・三〇	三五・一八七〇	○
畑	三・二五一九	六一・七八	四八・四五	○
宅地	四・三一二	一九・五八	一三〇・二〇	○
山林	二・〇五〇八	一九・九八	二四六・三二	町 五〇〇〇
原野	九・二二四	六・六〇	三五・六八	○
計	一〇・五八〇二	三一六・二六	四四一九・三五	五〇〇〇

二 大字久江ニ屬スル分

地目	被害反別	地價		復舊反別
		時	價	
田	町反畝 二九一三	九七二六	三〇九〇五	〇
畑	二七〇五	二九七七	四〇七五	〇
山林	一二〇一八	八七〇三	七二〇九六	〇
原野	〇八〇七	四九四	七七	〇
計	一二六六一三	二一四八三	一〇七五七〇	〇

又家屋其ノ他ノ建物ニ就イテ見ルニ此ノ谷ニ沿ウテ北木原ニ屬スル住宅八、土藏五、納屋三、廐六及ビ大字久江ニ屬スル水車ニアリタルガ、全ク無難ナリシハ土藏一、納屋一ノミニシテ、四月ノ地變前ニ自ラ取り壞テ其ノ材木ヲ他所ニ運ビタルモノ住宅六、廐三、水車ニアリ。而シテ今回ノ地變ノ爲メ地中ニ埋マリシモ辛ウジテ其ノ材木ノミヲ堀リ出セシモノ住宅一、土藏四、納屋一、廐二ニシテ全ク土中ニ埋没シタルモノ住宅一、納屋一、廐一ナリ。其ノ損害價額等左ノ如シ。

建物被害

建物種別	棟數	建坪數	損害價額
家屋	八	二〇四四五	一二〇〇〇〇
土藏	五	三〇四五	五一〇〇〇
納屋、廐	一〇	八七七五	一〇九〇〇
水車	二	五五五〇	一八〇〇〇
計	二五	三七八一五	一九九九〇〇

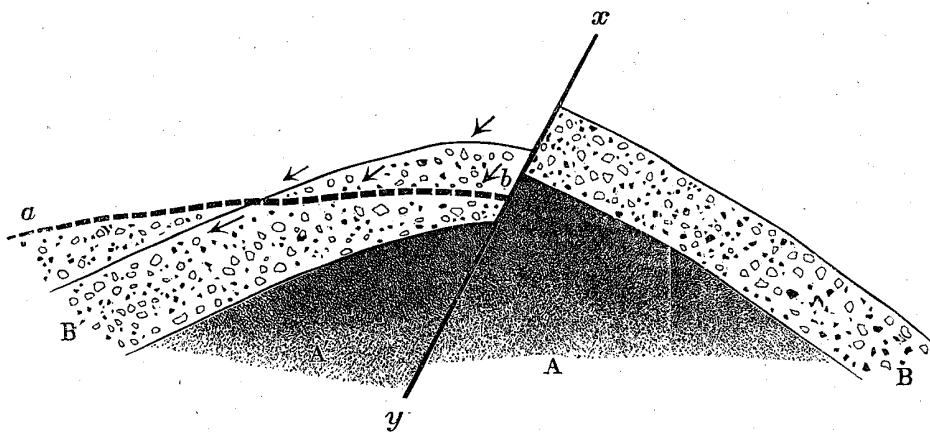
第三 地變後ノ状態及ビ地變ノ原因

此ノ地變ノ際ニ生ジタル陥落地ノ跡ヲ見ルニ恰モ爆裂火口ノ跡ヲ見ルガ如ク、其ノ泥土ノ押シ出シタルハ恰モ火山ノ泥流ニ彷彿セリ(實際ハ火山作用ニ少シモ關係ナシ)。而シテ陥落セシ箇所ハ稍々細長キ蹄鐵狀ヲナセル凹地ヲ作り、其ノ周壁ハ概ネ絶壁ヲナシ、其ノ高サ十間乃至十七八間ニ及ブモノアリテ恰モ多少桶狀陥落ニ似タル陥落ヲナセシモノ、如ク見エ(第五版乙第六版甲)。而シテ押シ出シ來レル泥土ハ厚ク谷ヲ埋メ、泥土ノ厚サ十數尺ヨリ二百餘尺ニ及ビ、谷ニ沿ウテ隆起セル小丘「明神ノ高ツブリ」ノ如キハ今回ノ地變以前ハ谷底ヨリ山ノ側面ニ沿ヒ斜ニ測リテ百四五十間許高カリシト稱スルモノナルガ、今ハ泥土ノ爲ニ山體ノ大部分ヲ埋メラレテ頂部三四十間ノ部分ヲ露ハスニ過ギズ(第四版乙)。從ツテ今マデ

狭カリシ谷底ハ廣クナリ、谷川ノ水ハ今マデノ流路ヲ失ヒ、此ノ軟キ泥土ノ上ニ數條ノ深溝ヲ作りテ所定メズ流下シ、盛ンニ土砂ヲ下流地方ニ齎ラシテ田園ニ損害ヲ及ボスコト少ナカラズトス。

元來此ノ地附近ノ地質ハ四十萬分一地質豫察圖ニ據ルニ花崗岩片麻岩ガ其ノ骨髓ヲナシ、第三紀層ガ之レヲ被フテ山ノ西側ニアルモノ、如クナレドモ余ノ見ル所ニヨレバ北木原附近ニ於テハ花崗岩片麻岩ハ甚ダ稀ニシテ、山體ノ大部ハ第三紀層ノ砂岩泥板岩ヨリ成リ、其ノ表面ハ黒雲母花崗岩及ビ片麻岩ノ塊片ヲ多ク混ユル壤土ニテ可成リ厚ク被ハル、ガ如シ。而シテ陷落ニヨリテ生ジタル絶壁ニ就イテ見ルニ、陷落ハ單ニ表面ニノミ起リタルニアラズシテ内部ノ砂岩泥板岩ニモ及ビタルコト明ナリ。從ツテ今回ノ地變ハ北木原部落ニ於テ土地ノ内部ナル砂岩泥板岩ニモ及ベル一ノ陷落起リ、其ノ砂岩泥板岩ハ單ニ落込ミタルノミニテ其ノ儘ナレド、表面ニアル泥土岩塊等ノ混合物ナル一層ハ粗鬆ナル故ニ陷落ノ際大ニ揉メテ相互ノ結合解離シ、ザクザクニナリ、或ル傾斜ヲ有セル谷ノ下方ニ向ツテズル々ト押し出セシモノナルベシ(下圖參照)而シテ陷落ノ原因ニ就イテハ或ル人ハ地下ニアル一大石灰岩層ガ溶解シテ大空洞ヲ生ジタルニ歸セントスレドモ、此地方

ニ露出スル石灰岩ニ就イテ見ルニ其ノ厚サ甚ダ小ニシテ、斯カル陷落ヲ起スガ如キ大空洞ヲ生ズベクモアラズ。而シテカ



ル陷落ヲ生ズルハ敢テ必シモ地下ノ空洞ニ基ツクモノニアラザルベシ。サレバ地下ニ或ル他ノ弱點アルニ因ルナルベシ。A' 砂岩、泥板岩ノ累層B' 花崗岩、片麻岩ノ塊片ヲ多ク含ム泥土。x yニ沿ウテ陷落起リ、A' ナル部分ハ落チ込ミタルノミニテ其ノ儘靜止シ、B'ハ陷落ノ際岩塊壤土相互ノ結合弛ミ矢ノ方向ニ押し出シ、其ノ表面ハa bトナル。B'ハ全體トシA'ノ表面ヲ滑リシニハアラズ。

第四 圖版説明

第一版 石川縣能登國鹿島郡久江村近傍ノ地形概圖

第二版 久江村大字久江原山分小字北木原變動地形概圖

變動地ニ於ケル谷川ハ現今常ニ其ノ流路ヲ轉シ一定セザルヲ以テ之レヲ示サズ。

第三版甲 能登部停車場ヨリ東方ニ久江村ノ變動地ヲ望ム。

寶達山脈ノ地形概畧ヲ示ス。(イ)、久江村大字久江。(ロ)、北木原變動地。

同乙 久江村大字久江原山分小字中原ノ谷。

今回地變アリシ北木原ノ谷ノ本來ノ地形ハ今明ナラザル故之レニ隣レル中原ノ谷ニヨリテ北木原ノ谷ノ地形概略ヲ察スルニ便ス。北木原ノ谷ニ於テハ左右ノ谷側ハコノ谷ト同シク急傾斜ヲナセドモ谷川ノ勾配ハ之レヨリモ稍緩ナリ。

第四版甲 北木原ノ谷ニ沿ウテ押シ出シ來レル泥土ノ末端。

火山ニ於ケル泥流ノ如キ觀アリ。泥土ノ厚サハ數尺乃至四十尺許。前者ヨリモ更ニ谷ノ上方ニ於ケル泥土押シ出シノ狀ヲ示ス。

此ノ邊泥土ノ厚サ數十尺乃至二百餘尺。(イ)、「明神ノ高ツブリ」、此ノ山モト谷川ニ接シテ起リ、斜面ニ沿ヒ測リテ高サ百四五十間ナリシモノナリト云フガ、今ハ泥土ニ埋モレテ僅カニ項部三四十間ノ所ヲ露ハニ過キス。(ロ)、鉢臥山。(ハ)、押シ出シ來リ且ツ埋没シタルニ北木原ノ部落ニシテ、モトハコ、ヨリ百五六十間ホト上方ニアリタルナリ。

第五版甲 前者ヨリモ更ニ上方ニ於ケル土地ノ陷落及ヒ押シ出シノ狀ヲ示ス。

(イ)、陷落ニヨリテ生シタル絕壁。(ロ)、モト北木原ノ人家ノ在リシ位

置。(ハ)北木原ノ人家ノ在リシ部分押シ出シ來リ、且ツ土中ニ埋モレタルモノ。

同乙 モト北木原ノ人家ノ在リシ場所近傍ノ陷落ヲ示ス。

陷落ニヨリテ生セル絕壁ノ高サ十間乃至十七八間。

第六版甲 北木原人家附近ノ陷落ニヨリテ生セル絕壁。

同乙 同上。

第五 參考書類

本地方ノ地變ニ關スル參照書類トシテハ

明治三十二年三十四年ノ地變ヲ記セル

震災豫防調査會報告第三十八號(囑託員理學博士神保小虎提出山梨石川靜岡

三縣下ノ地割レ山崩レ等調査報告)及ヒ今年ノ地變ヲ記セル

大坂毎日新聞(明治三十七年五月四日)

北國新聞(金澤市、明治三十七年四月二十日、同五月四日)

扶桑新聞(名古屋市、明治三十七年四月三日)

時事新報(明治三十七年五月七日)

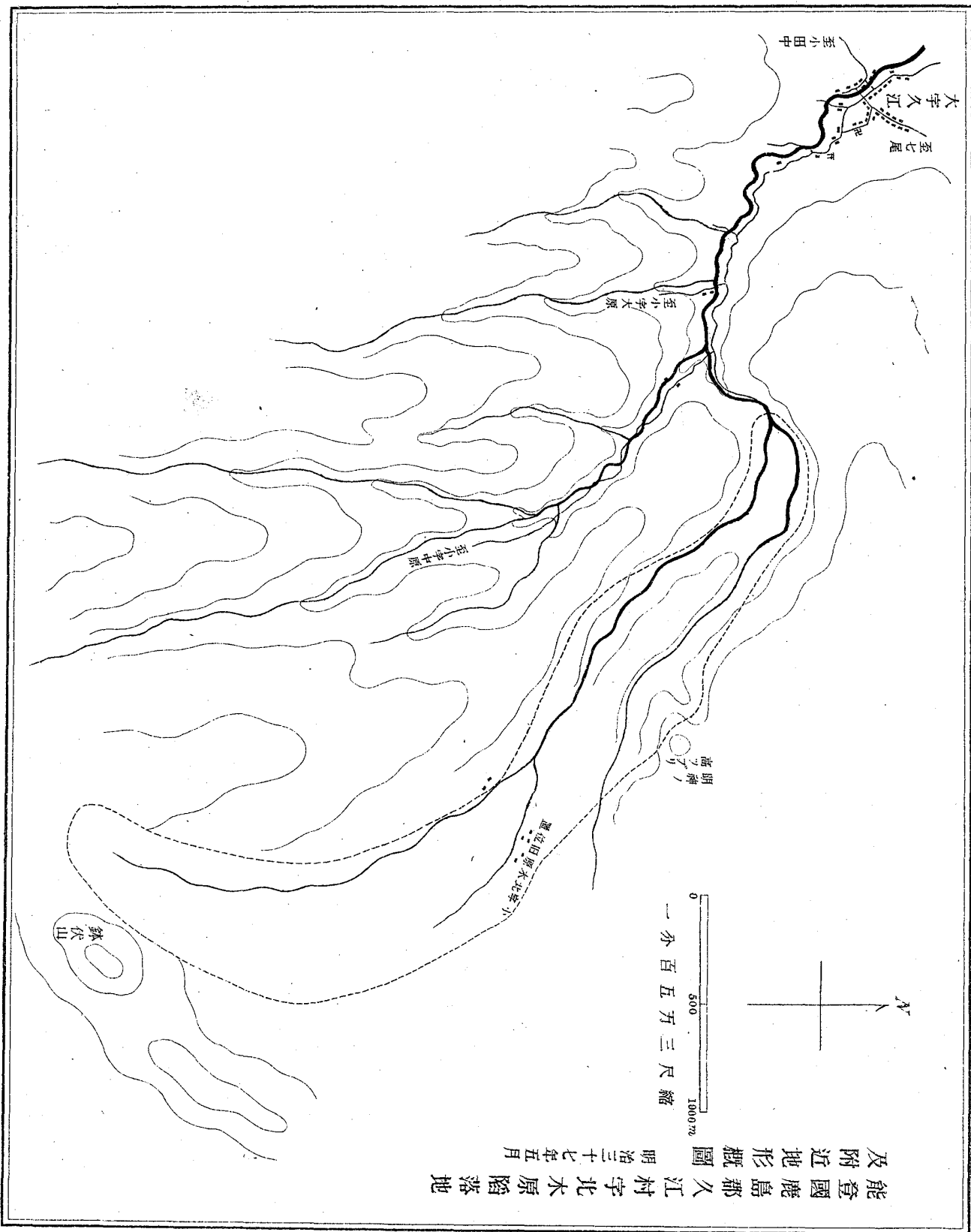
二六新報(明治三十七年五月六日)

東京日々新聞(同)

電報新聞(同)



能登國鹿島郡久江村宇北木原陷落地
及附近地形概圖 明治三十七年五月



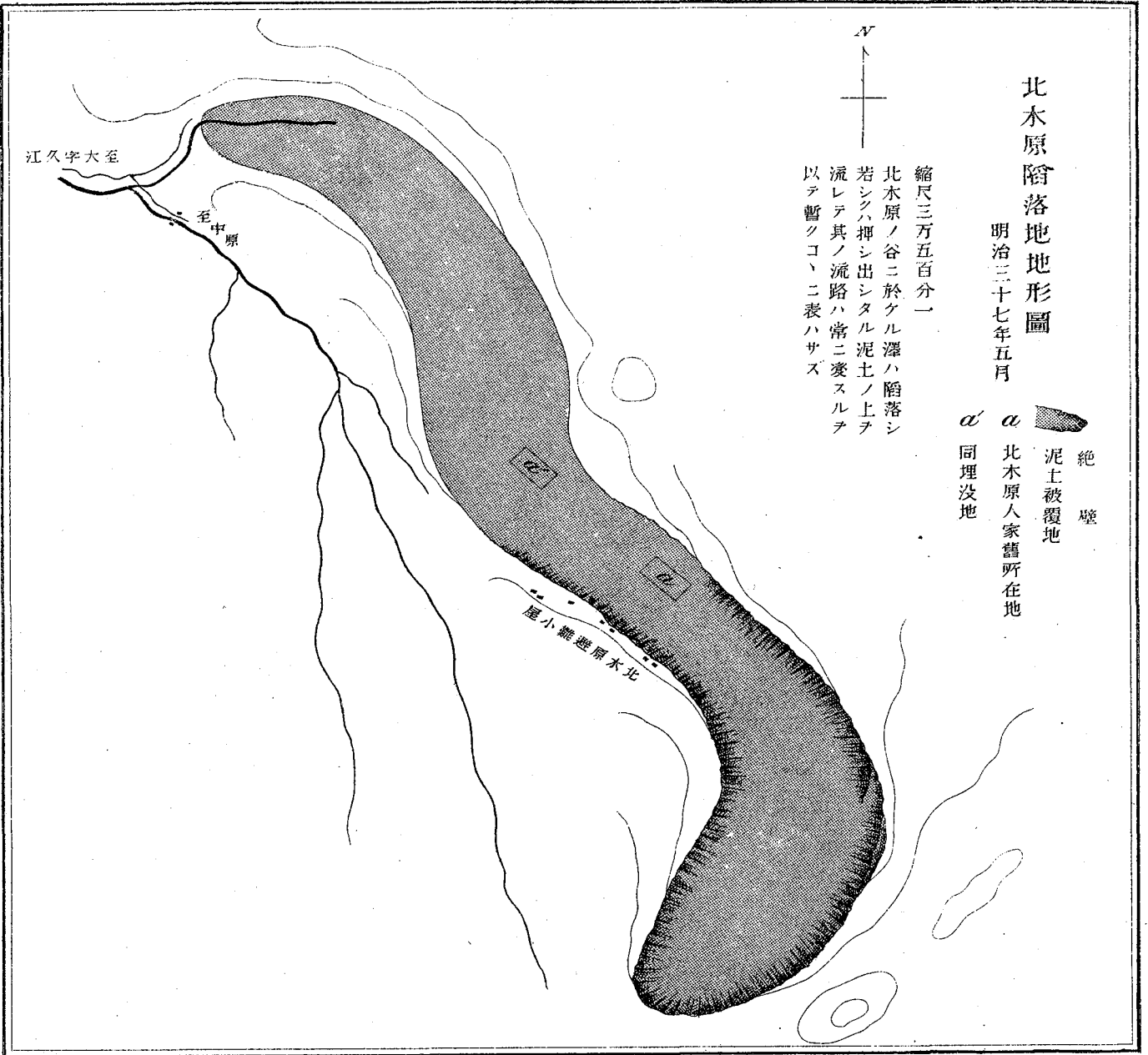
北水原陥落地地形圖

明治三十七年五月

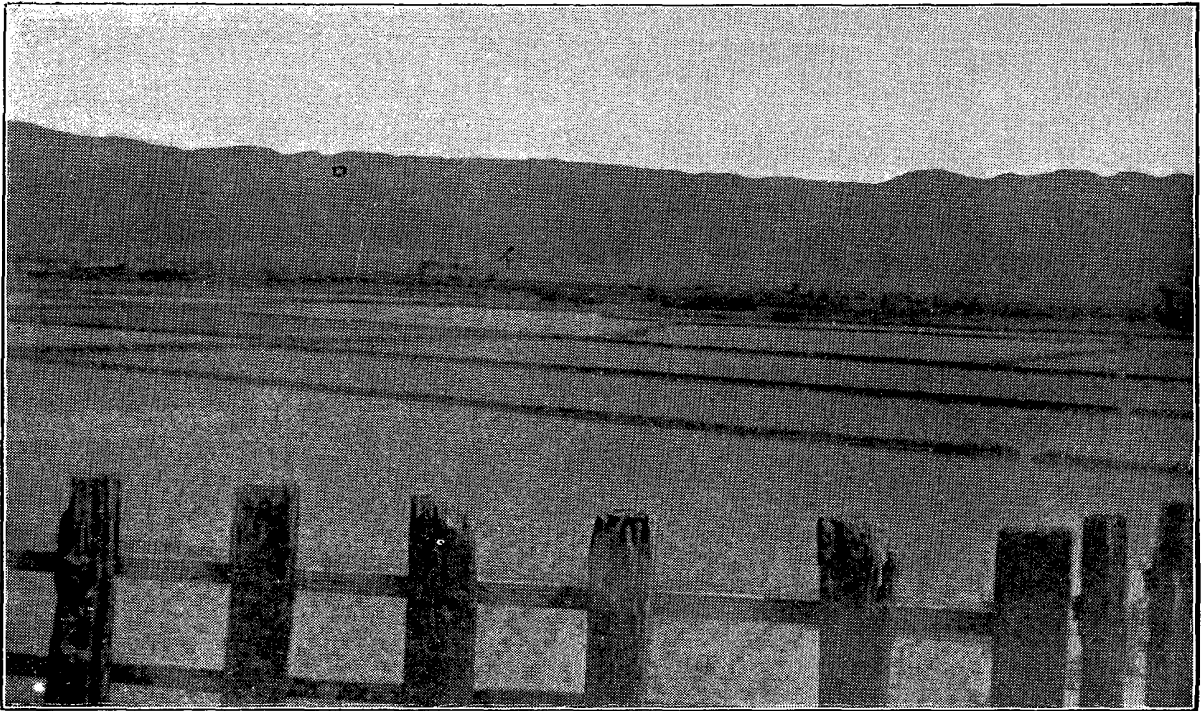
縮尺三万五百分一

北水原ノ谷ニ於ケル澤ハ陥落シ
若シハ押シ出シタル泥土ノ上テ
流レテ其ノ流路ハ常ニ変スルヲ
以テ暫クコヽニ表ハサズ

- 絶壁
- 泥土被覆地
- a 北水原人家舊所在地
- a' 同埋没地



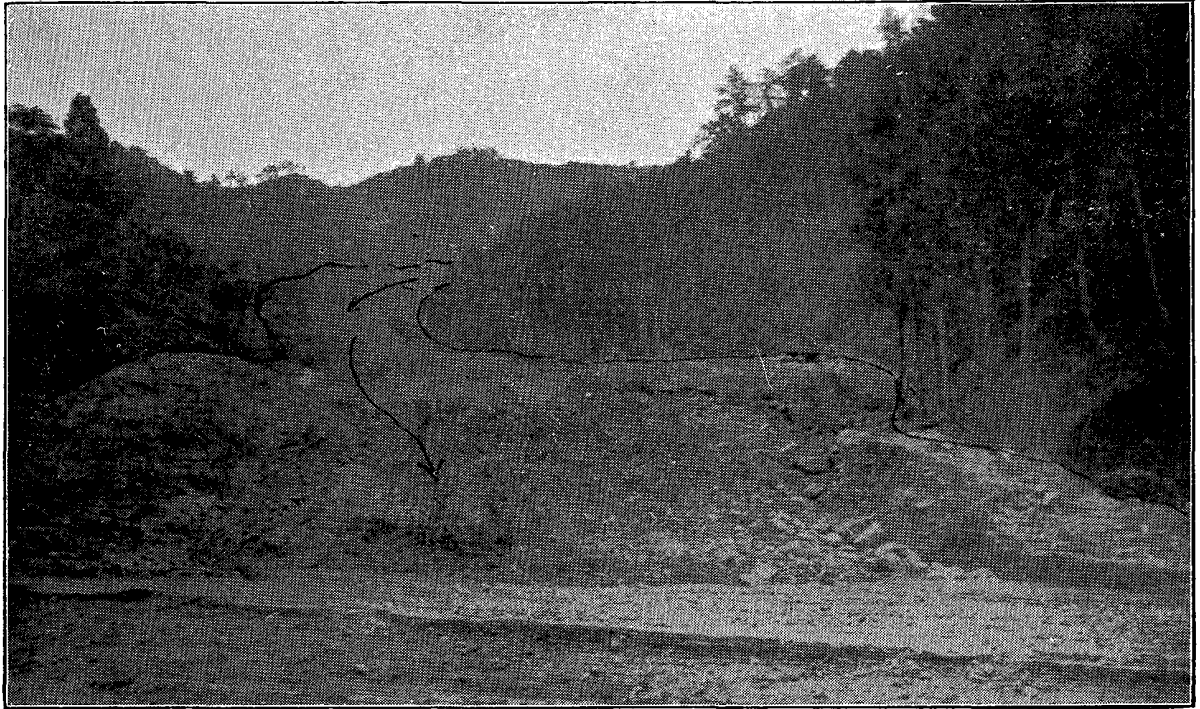
甲



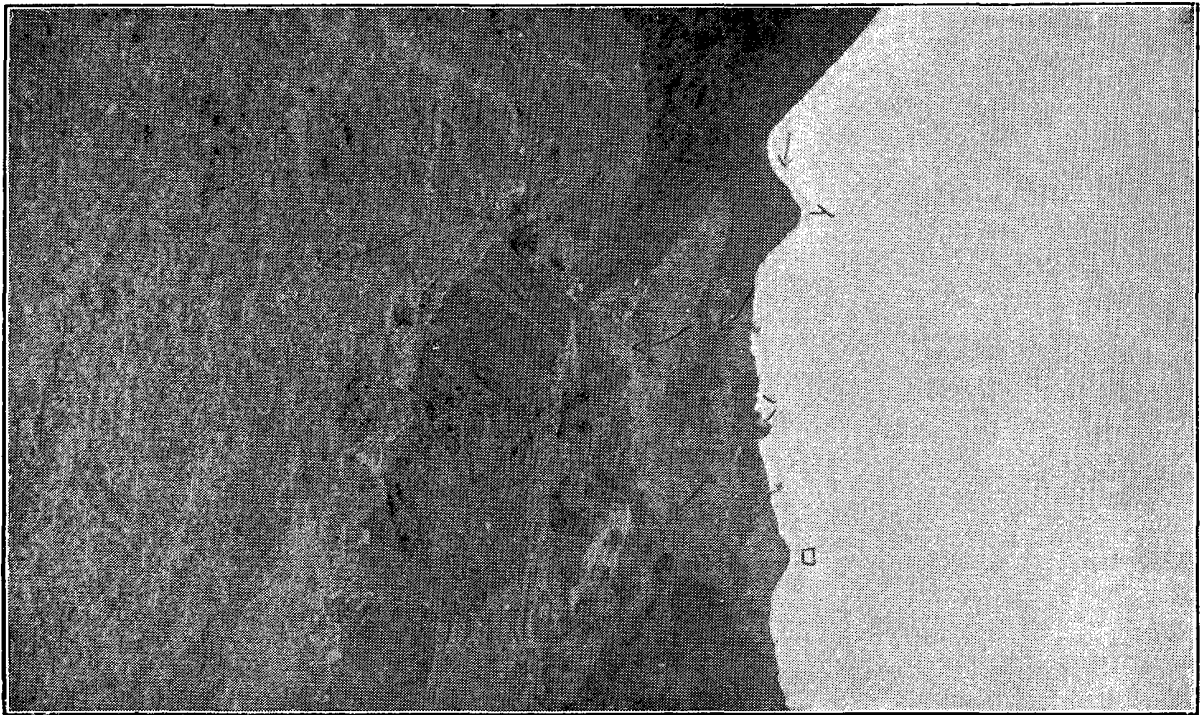
む望を地動變村江久び及脈山達寶に方東りよ場車停部登能



谷溪の原中宇小村江久



端木の土泥るれ來し出し押てう沿に谷の原木北

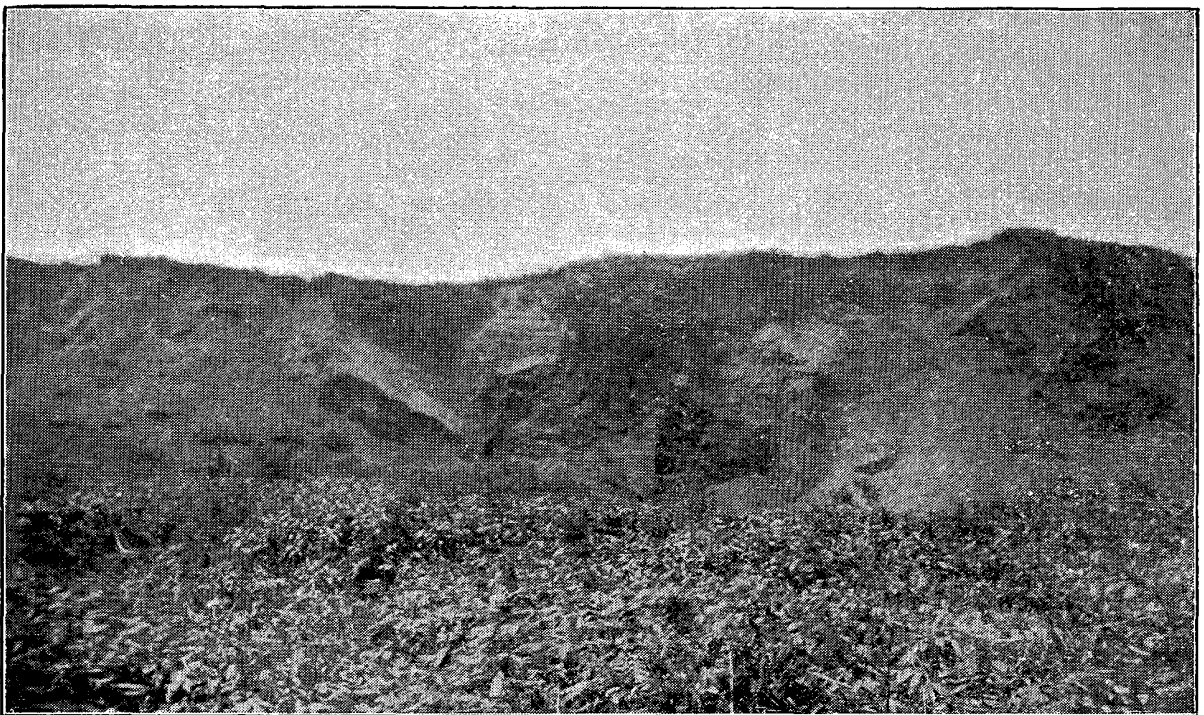


態状のし出し押土泥るけ於に谷の原木北
(方上₁の谷に更もりよ甲)

甲



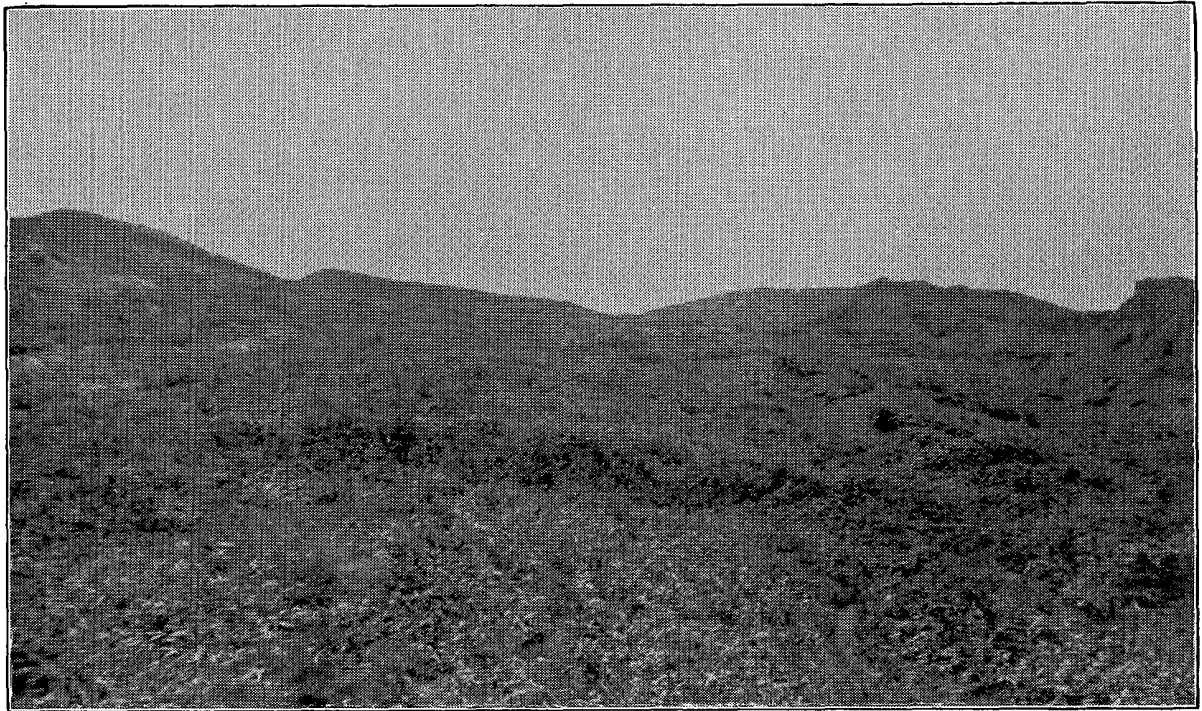
態状のし出し押土泥び及落陷の地土るけ於に原木北



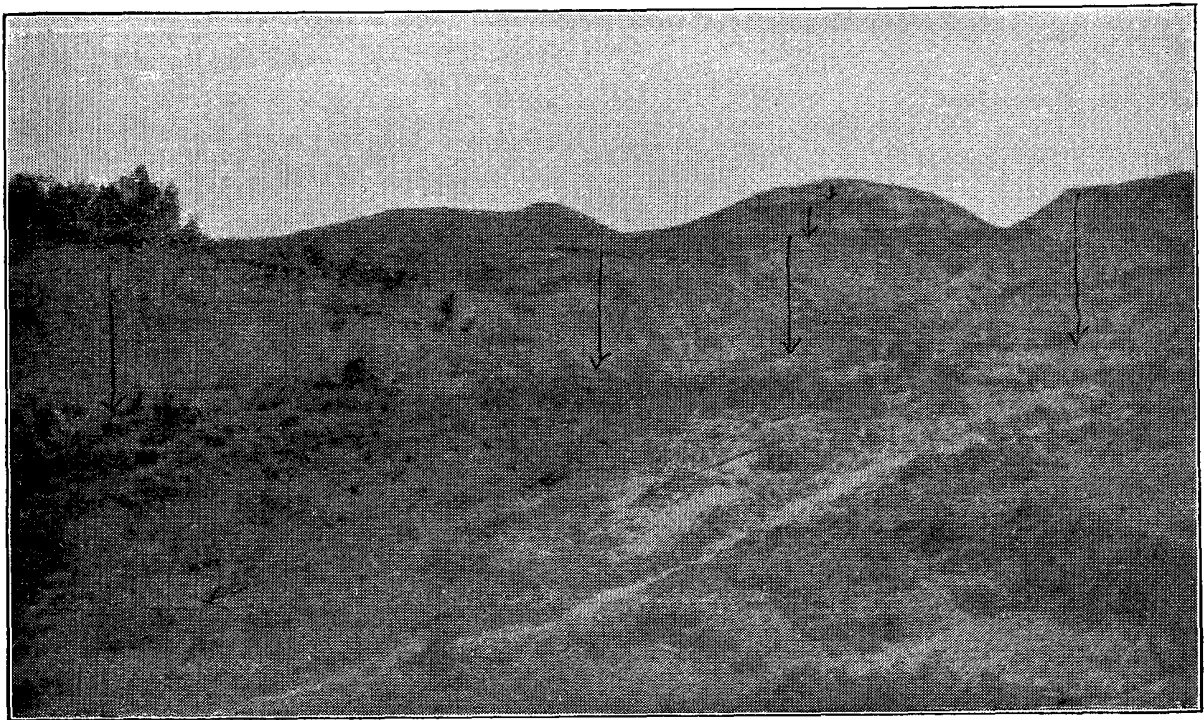
(リゼ生を壁絶め爲の落陷) 態状の落陷近附家民原木北

乙

甲



北木原民家附近に於ける土の陥落



乙

上

同